

〈(1) なかなか人にとあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ〉。《A いっそ人間をやめ、ずつと酒に浸れる酒壺になりたい。①突拍子(とつぴょうし)もない願望を歌にした人がいたものである。②大伴旅人(おおともものたびと)。奈良の昔、③公卿(くぎよう)にして一流の教養人だった▼旅人は天平2(730)年春、九州・大宰府の公邸で④宴(うたげ)を⑤催(もよお)している。招かれたのは九州一円の役人や医師、⑥陰陽師(おんみょうじ)ら31人。庭に咲く梅を詠み比べる歌宴だった。〉(2) 初春の令月にして、気淑く風和ぎ。旅人の書き残したとされる開宴の辞から採られたのが、新元号「令和」である▼辞には続きがある。「天空を覆いとし、大地を敷物として、くつろぎ、ひざ寄せ合って⑦酒杯(しゅはい)を飛ばす。《B さあ》園梅を歌に詠もうではないか」。枝を手折り、雪にたとえ、酒杯に浮かべる公卿らの姿が浮かぶ▼(3) 「令和」にどのような感想をお持ちになっただろう。令和の字を名に持つ方は、これからしばらく話題に事欠くまい。ここを⑧シヨウキ(商機)と万葉集コーナーを設けた書店もある。お祭り騒ぎはしばらく続きそうだ▼さて、万葉の昔に戻れば、60余年の大伴旅人の生涯に、元号は驚くほど⑨ヒンパン(頻繁)に代わっている。《C やれ》⑩吉兆(きつちよう)の亀が発見されたと言って「神亀」。奇跡の水が見つかったと「養老」。ほかに「朱鳥」「大宝」「慶雲」「和銅」「靈龜」「天平」。《D まるで》改元のインフレのようである▼そんな時代を知る旅人だが、(4) 酒席で述べた挨拶が1300年後の元号になってしまうとは。二日酔いの夢にも想像しなかったことだろう。

〔2019年4月2日「天声人語」〕

問一 ①～⑩のカタカナ部は漢字に直し、傍線部は読みを書き入れなさい。

問二 傍線部(1)「なかなか」を口語訳しよう。

(中途半端に)

問三 次の() に適する語を語群から選び、書き入れよう(出典「酒讃歌」)。

- ・(駿) なきものを思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし
- ・あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば(猿) にかも似む
- ・(価) なき宝といふとも一坏の濁れる酒にあにまさめやも
- ・この世にしたのしくあらば来む世には虫に(鳥) にも我はなりなむ

〔語群〕 ・価 ・駿 ・鳥 ・猿 ・酒 ・玉

問四 《A》《D》に適する語を次から選び、書き入れよう。

- ・さあ ・まるで ・やれ ・いっそ ・かつて

問五 傍線部(3)について、あなたの抱いた感想を30字程度で述べてみよう。

〔答例〕(注目度は高いようだが、日本は元号をいつまで使い続けるのだろうか。)

問六 傍線部(4)から伺える筆者の気持ちに最も遠い選択肢の記号を○で囲もう。

ア 酒席の挨拶からの元号に疑問。 イ 新元号はそれぞれに受け止めよう。

ウ 元号への尊重はほどほどに。 ⑤ 今回は意外な言葉が元号に採用された。